

なすことも なき身の夢の さむるあけぼの

—テクノクラート小堀遠州にみる近世行政官の矜持—

細野 哲弘

独立行政法人 エネルギー金属鉱物資源機構 理事長
(元 特許庁長官 元資源エネルギー庁長官)

藤堂高虎の娘を娶り、蒲生氏郷らと並んで「利休七哲」の一人とされる古田織部の愛弟子であり、故に細川忠興とも因縁がある御仁であって、当然、茶の湯、陶芸に通じ、それらに留まらず、建築、作庭でも今に残る数々の足跡を残した文人行政官僚がいる。また、彼は浅井家重臣から転じ織田信長の幕僚になった磯野員昌の孫¹⁾にあたり、羽柴(豊臣)秀長に仕え、徳川家光の茶道指南でもあった。時代性といい、関係する者のラインナップからしても、これまでの本誌拙稿のどこかで触れていてもおかしくないのだが、不思議と初登場である。



小堀遠州像(長浜市「五先賢の館」展示物より)

筆者が「小堀遠州」という名に接したのはそれほど以前のことでない。最初は、実務官僚としての切り口であった。しかし、その存在の面白みを立体的に認識して関心を高めたのは、以前別稿取材でお世話になった静嘉堂文庫の所蔵品目録に彼ゆかりの茶道具の陶芸作品が含まれているのを見つけたのが、契機であった。残念ながら、筆者にその方面の素養はないので、本稿では、茶碗、茶入れとか名物裂などについての蘊蓄は微塵も出てこない。

ここでは、小堀遠州という人物が、安土桃山と称される時期の時代性と、近江や大和の土地柄・風土の中で、どのように育まれたのかを描いてみたい。なお、遠州は本名を政一^{まさかず}と言い、遠州というのは慶長13年(1608年)に駿府城作事の功により従五位下遠江守に任じられた故の呼称であるが、便宜のため本稿ではこの名前で統一する。

小堀遠州政一^{まさかず れっき}は歴とした大名である。その父小堀正次は、戦国の世の先行きを見通しよく生き抜き、徳川時代初期にあって備中国奉行を務めた。遠州は、正次の急死によりその家督を継いで備中の国奉行の任をも引き継いだ。元和5年(1619年)近江国浅井郡に任地替えとなり、浅井郡小室村に政庁を置いた。その後近江全体の国奉行を命じられ、さらに伏見奉行にも任じられて、正保4年(1647年)2月、69歳を一期にこの世を去るまで30年近くの長きに亘って伏見奉行の任にあった。この国奉行というのは、国持大名とは趣を異にして、幕府から派遣されてその施策を執行する行政官僚的なものであったが、各地の所領を合わせて1万2460石²⁾という石高は堂々たる大名である。遠州は小室藩初代藩主と言われる。また、伏見奉行というのは幾つかある遠国奉行の一つではあるが、司る伏見という地は何ととっても秀



小堀正次像(長浜市長浜歴史博物館編「小堀遠州のプロフィールブック」より)

- 1) 遠州の父正次の妻(遠州の母)は、磯野丹波守員昌の娘であり、当時は正次も浅井の家臣であった。同じく浅井家に一時寄宿した明智光秀とは出身地も極めて近かった。
- 2) 父正次からの1万4460石の相続に際し、遠州政一は弟正行に2000石を譲り、残りを相続した。

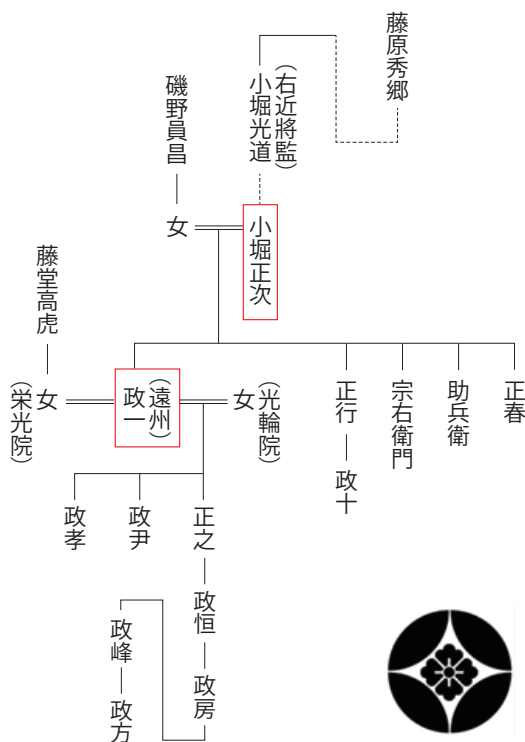
吉時代の政治の中心であり、京の南口にあたり大津街道、大和街道、伏見街道、竹田街道といった重要街道に繋がる要衝地であり、伏見城が廃城となったあとも物資、往来の行き交う宿場町として栄えた。奉行はこれらに係る行政、準司法を掌握し、のちに宇治、木津、伏見の川筋の船舶をも管轄した。

先に、父を相続して……云々と述べたが、遠州の父正次は元々浅井家の有能で多才な事務官僚であった。小谷城落城、浅井氏滅亡の折、羽柴秀吉の陣に降り、以後秀吉の弟である大和大納言こと羽柴秀長の家老格となり、3千石を領した。秀吉の命で国許を離れることの多かった秀長に替わり、大和、紀州の治行に立派な業績を残した。大和郡山城にあって、奈良の寺社勢力の武装解除を促し、所領の検地を進め、領内の興産、新しい街づくりのために税の優遇措置などを施した。大和郡山では「箱本制度」という商工業の朱印状による自治制度が導入され、今に伝わる朱印状には正次の署名になるものが少なからず認められる。関ヶ原の戦いでは徳川の旗下で参陣し、戦後備中で1万石を加増されている。

遠州は7歳から父に従って大和郡山に移り住み、以後備中まで父の下で薫陶を受け、その行政手腕を具に見て生育した。26才で父の所領を引き継いだとき、時代は家康の天下といってもまだキナ臭さが色濃く残っていた。遠州がまず取り掛かったのは隣国の監視であった。備中の隣国の備前、美作は関ヶ原の合戦以後小早川秀秋の所領とされたが、寝返りの前歴を持つ秀秋への牽制として、その動静に目を光らせることが大事な役割であった。ただ、備中を国奉行による幕府直轄領としたのは、領内で産出する良質な銚鉄と檀紙と呼ばれる良質の紙を幕府の管轄に置くという狙いもあった。興産に実績を挙げた父の業績を買われてのことであった。なお、先に述べたように、遠州はその後伏見での重要行政の比重が増し、備中領国へはいわゆる遠距離指図経営を強いられたが、それも難なくこなしている。

行政官僚としての堅実な仕事ぶりもさることながら、本稿の重要テーマである遠州の芸術性、美術感覚に影響を及ぼしたであろう幼い頃のエピソードを記しておきたい。羽柴秀長に仕え大和郡山に赴いた父正次に付いて秀長の屋敷に出入りしていた遠州は、偶然千利休のお点前を垣間見る幸運に恵まれる。天正16年(1588年)、兄秀吉を自分の屋敷に招き茶の接待をすることになった秀長は、当日の作法の確認のため秀吉の茶頭を務めた利休に依頼してその指導を受けたのである。邸で奉公中だった遠州は、開け放たれた座敷の障子の外から、利休の見事な点前を目の当たりにすることができたのである。遠州10歳の時の出来事である。そして、それは生涯唯一の利休との遭遇であった。天才にしかわからない鋭敏にして繊細な感覚を彼は衝撃的に受け止めたのであろう。永く遠州はその時の思い出を語っている³⁾。

ただ、そのことは遠州の茶湯の流儀が利休のそれに影響されたということでは必ずしもない。冒頭お断りしたように、筆者の乏しい茶湯の素養で論じるのは覚束ない限りであるが、侘び寂びを追求し「どんだん暗く窮屈になっていった利休の茶道」に対し、「綺麗さび」と言われる明るく伸びやかに創意工夫を走らせるのが「遠州の茶」の真髄と言われている。



小堀家系図と家紋

3) 葉室麟に「孤蓬のひと」という小説があり、その冒頭近くに遠州が秀長に作法指導する利休と相見(あいまみ)え会話するくだりがある。利休の用いる黒い茶碗の印象のほか、二人の間で石田三成の事などが話題になっているが、実際にはありえない設定である。ただ、遠州がのちに極める茶道との違い、遠州と三成が同じ土地の人間であることをさり気なく含ませて、小説展開の面白い伏線にしている。

伏見奉行を長く務めた遠州は、要衝の地での奉公ゆえに領国になかなか戻る暇がなかったと書いたが、実は伏見にもずっと居たわけではない。一体何をしていたのか？ ここからが本稿の主題である。精神性の高い茶の湯には深入りできない筆者ではあるが、「この目で見て、足で稼ぐ」ことで少しは感じを伝えられる作庭、建築作事の分野での業績を追うことで、遠州像を探っていききたい。以下は、漸くにしてコロナ禍の行動制限が緩んだ合間を縫っての令和4年春の取材行脚のレポートである。

これより順を追って彼の差配した庭や建物を紹介していくが、多くは「公事」つまり公の目的での建築などに伴う仕事である。作事奉行、惣奉行といった立場で携わっている。

遠州が手がけた作事は多繁に亘る。先に駿府城作事に携わったことを記したが、その2年前の慶長11年(1606年)には28歳で後陽成院の御所建築にも携わり、以後後水尾院・東福門院御所、明正院御所、内裏の惣奉行を務めるなど朝廷関係の作事に多々関わり、当然のことながら、幕府枢要建築にも多く関与した。名古屋城、大坂城、伏見城、二条城、水口城(近江国甲賀郡)などの作事がそれである。

二条城は京都にあって幕末の大舞台の一つとして格別に「有名な史跡」であり、内外の多くの観光客が訪れる場所である。筆者も小学校の修学旅行で訪れて以来幾度となく足を運んだ馴染みの場所である。しかし、その庭園を小堀遠州の縁のものとしてじっくり眺めたことはなかった。改めて訪れた春の

二条城は外国人のいない落ち着いた風情の中で穏やかに佇んでいた。筆者が特許庁にお世話になっていた時期に「三極特許長官会合」という催しを京都で主催し、門川市長のご厚意で、二条城の敷地の北側にある清流園⁴⁾の香雲亭で米国、欧州の長官に着物を着てもらい、庭を愛でながらお茶を振る舞うというアトラクションイベントをした記憶がある。

遠州が二の丸御殿⁵⁾の庭園造作を仕切ったのは寛永年間(1629年)である。御殿の庭そのものは家康が二条城を築いた当初(1603年)からあったようだが、後水尾天皇と中宮和子⁶⁾をお迎えするために大改修することとなり、その造作の指揮を遠州が取った。

庭園は時代が下って度々改修の手が入ったので、当時の意匠は現在のそれとは異なっているようだが、池の真ん中に小高く蓬莱山を擬した島を、そしてその左右に前後して鶴島、亀島を配する趣向はいわゆる「神仙蓬莱思想」の典型である。蓬莱山は手前に比較的低い松を、後ろには背の高い木を配して奥行きを感じさせる幽谷の雰囲気を出している。蓬莱島を囲む八つの大きな護岸石組は八角形を成しているため、この庭を「八陣の庭」とも称する。主に二の丸御殿の大広間、黒書院側から眺めることを想定し、水と岩の呼吸をはかり、植栽の塩梅を緻密に計算して工夫されている。右奥の滝は、遠州はもう少し南の岩の上の部分から段を経て落とされていたとされている。武家の庭は禅宗の影響を受け、剛直を旨として花や紅葉ではなく移り変わることはない岩や常緑樹を以って構成する。

さらに、池の南側には後水尾天皇と和子女御のた

- 清流園は建築部材、庭石、樹木の多くを豪商・角倉了以の角倉家屋敷跡から譲り受け、京都市が迎賓施設として整備した庭園である。長官会合でお世話になった当時は全く意識になかったが、清流園の庭を設計した中根金作氏は「昭和の小堀遠州」と言われた人であることを今回初めて知った。
- 二条城は大政奉還の場所として有名なため、その場所である大広間のある御殿を二条城の本殿と思いがちであるが、これはあくまでも「二の丸御殿」である。別にちゃんと内堀を穿った「本丸」があり、「本丸御殿」もあって、その敷地の隅には5層の立派な天守閣もあった。こうした曲輪(くるわ)の縄張りや「輪郭式」という。残念ながら、天守閣は伏見城から移築したとされる二代目のそれが寛延3年(1750年)の落雷で焼失して以来再建されず、現在は天守台が残るのみである。本丸は意外に訪れる人が少なく、筆者も今回初めて入った。南東隅の天守台は所謂「打込接ぎ」という手法で組み上げられた立派な石垣で、家康時代の自然石をそのままに、あるいは割っただけで積み上げる穴太式の「野面積み」とは異なり、粗く加工して石の接合部の噛み合わせを向上させており、より高くより急な角度での石垣作りが可能となっている。当時の京の街では抜群の眺望を誇ったに違いない。後水尾天皇は行幸の間に2度に亘って天守閣に登られたとある。なお、後水尾天皇は天皇として初めて古今伝授を受けられたことでも有名(本誌304号「心の種を残す言の葉」を参照)。
- 和子は二代將軍秀忠とお江の方の間に生まれ、三代將軍家光の妹に当たる。朝廷との融和の象徴として入内し、のちの明正天皇を産んでいる。後水尾天皇の二条城への行幸は、秀吉が後陽成天皇を聚楽第にお迎えしたことを倣ったとされている。



三極特許長官会合 2009



二条城本丸天守閣の石垣(京都二条城の本丸の南西角にある。改めて見ると堂々たるものであるが、東側の二の丸御殿が有名過ぎてなかなか目が届かない。)



京都二条城二の丸御殿庭園（大広間方面からの眺め）



京都二条城二の丸御殿庭園（黒書院方面からの眺め）

めに、御幸御殿、中宮御殿、長局^{ながつぼね}などの建物が追加で作られたため、南側からの眺めにも応えられるよう、石の配置をそのままにしつつ南縁に近い主な石組の向きを置き換えることにより、南正面性も確保されているとのこと。「……とのこと」と言うのは、南側のこれらの建物は後水尾天皇の譲位とともに仙洞御所に移築され、また南の区域は現在周遊のコースから外れているため、実際にはその角度からの庭の眺めを得ることが叶わないからである。が、しかし、当時は舟入まで建物の階が伸びていたとされ、趣向を凝らして三方向いずれも正面という立体的な造作を目指した遠州の意欲は強く感じられる。

鶴と亀の島はそれだけをぼんやり見ていると具象的には決してそのようには見えないのだが、角度を変えて蓬莱山の立ち岩や石の配置との間合いを、矯めつ^たす^がめつ時間をかけて繰り返して眺めていると、「なんとなくそうかなと思えてくる」から不思議である。理想郷を模した庭は見る人の空想力によって姿を変える。

なお、二条城からの建物移築先の仙洞御所（京都

御苑内）は、上皇の住まいとして造られたが、何度も火災の被害にあって移築の建物は全て失われ、光格上皇までの5代の上皇のあとそこに住まわれる上皇に途絶があったため、以降御所は再建されずに今日に至っている。隣接して皇太后の居所として設けられた大宮御所⁷⁾があり、両御所の庭は共通で、遠州の意匠が反映されたという。しかし、後水尾上皇が元のこじんまりした池を舟遊びができるまでに拡張され趣向も変えられたので、一部に残る荒削りの立ち岩を除き、残念ながら遠州の匂いは残っていない。

南禅寺には遠州の庭が二つある。一つは、大方丈前にある「虎の児渡しの庭」⁸⁾である。これは池や滝を使わない枯山水の庭で、水は白砂によって表現されている。先に「移り変わりのない岩や常緑樹」と書いたが、枯山水は移り変わりのなさをより抽象化したものである。ここでは、二条城などのように須弥山や蓬莱山を石組で表すのと異なり、塀に沿ってうまく遠近技法を操りながら大小の石を配置して、母虎が児虎^{こわ}を啜^くえて河を渡る様を表している。

もう一つが金地院の方丈南庭である。金地院は、狩野探幽の襖絵、長谷川等伯の猿猴の襖絵や遠州の手がけた八窓席の茶室も有名で、数寄屋、鎖の間、東照宮などの建物も遠州の指図であるが、庭は多忙を極めた遠州が金地院崇伝からのたつての依頼で作庭した「半公事」的な作品。しかし、依頼した崇伝は將軍家光の上洛の際の台臨を意識しており、いわ



南禅寺金地院方丈庭園

7) 大宮御所は、近世では御東幸（天皇の東京への行幸のこと／京都では「遷都」とは言わない！）のあと天皇が京都滞在中の宿舍として使われたが、現在の京都迎賓館ができるまで外国賓客の宿舍としても使われた。

8) 「虎の子渡し」とは、三匹の児虎のうち一匹が獐猛で母親と一緒に居ないと他の児虎を食い殺してしまうという設定で、母親が一度に一頭しか啜^くえて運べない状況下で、どうすれば三匹を無事に河の向こうに渡せるかというクイズのような禅のお題。



南禅寺金地院八窓席（寛永5年ごろの遠州の指図でできた茶室。躰口（にじりぐち）は小書院の縁側にあり、客は路地から縁側上がる設計。八窓という名前ながら窓は6つである。大徳寺孤篷庵の忘筌席と曼壽院（まんじゅいん）八軒席とあわせて「京都三名席」と称される。）

ゆる「^{おなり}御成の庭」の形式をとっている。その意味では二条城の作庭に近い意図が窺われる。比較的ゆったりした空間を使い、崖地の傾斜や蓬莱石組を駆使した庭作りをしている。白砂で海洋と船を表しその左右に亀島、鶴島を配置するのは他の蓬莱と同様の意匠だが、方形の長めの切石はその向こうにある東照宮の遥拝石である。

また、京都の西賀茂にある正伝寺⁹⁾には「獅子の児渡しの庭」という庭園がある。これも遠州作と言われているが、石の代わりにサツキの植え込みという変わり種である。サツキの刈り込みで七五三調を表した枯山水だが、これも「どこが獅子なのか」と思うのは野暮というもの。むしろ比叡山を丸ごと



正伝寺庭園（京都市）

借景にしたスッキリとした開放的な趣向を楽しむべきであろう。

さて、遠州の庭を語るに外してはいけないのが、^{こほうあん}孤篷庵である。

京都の大徳寺孤篷庵は、大徳寺の広大な境内の北西の角、市立紫野高校の隣にある。もともと5年に一度程度しか公開されないのに、ここ2年間はコロナのために更に公開が延び、令和4年の5月から6月の限定公開は実に7年ぶりであった。朝早くから並んで、少人数毎に案内されて解説を聞きながら内部を拝見してきた。この建物は寛政5年（1793年）の火災の後に再興されたもの¹⁰⁾。ここの主題は遠州の故郷の琵琶湖である。建物に入って小さな舟から



大徳寺孤篷庵（正面入り口）



大徳寺孤篷庵（舟窓—縁側からの眺め）

9) 正伝寺は方丈の狩野山楽の枯れた襖絵（重要文化財）も見どころだが、何と言っても血天井が有名。これは、関ヶ原の戦いの前哨戦で家康から必死の伏見城を託された鳥居元忠が、落城の際最後まで奮戦して残った380名と共に割腹自害し、夥しい血痕を残した廊下を方丈広縁の天井にしたもの。なお、寺の縁側に置いてあった新聞の切り抜きによれば、一時代前のグラムロックのスターで俳優でもあったデイヴィッド・ボーイが来訪したことがあり、庭の佇まいに感動したとある。一時日本にも住んだほどの日本好きで、日本の伝統的服束装飾、芸能にも関心を示した彼の感受性をうかがわせる。

10) 孤篷庵は、元々は慶長17年（1612年）に同じ大徳寺塔頭の龍光院に建てた庵を、寛永20年（1643年）にこの地に移築したものであるが、本文に記したように寛政5年に建物は焼失。のちに遠州の趣を愛した松江の松平不昧（まつだいらふまい）公により、方丈、書院、忘筌などが復興された。庭はともかく、建物内部の襖絵や詠えが遠州当時のものであるとの解説を聞いて不思議に思ったのだが、襖などが漆の木枠のまま取り外せるようになっていて、それにより消失を免れたとあって大層感じ入った。

始め段々と大きな船に乗って進むが如く詭えがなされている。孤篷庵の「篷」は茅などを編んで舟の上を覆う苫^{とま}のことで、孤篷とは孤舟の意味である。訪れた折は本堂の前庭の籬^{まがき}の先にある樹木が伸びて隠れていたが、籬を水平線とみなしその向こうに見えるはずの船岡山を船に見立てているとのこと。直入軒前庭は近江八景の庭と言われる枯山水だが、ここでは庭は何故か白洲ではなく赤土であり、特に波立たせてもいないが、これによって琵琶湖の水を表している。有名な書院式の忘筌席^{ぼうせんせき}¹¹⁾は本堂の北西にある茶室で、庭に向かって舟入板の間となっていて、障子が上半分だけで下は吹き抜けという趣向。西陽を調節した明かり取りとしても有効で、手水鉢、灯籠、植え込みが見えるようになっている。

実は、孤篷庵と称する庵は滋賀県にもある。現在の長浜市小堀町が遠州の生誕地で、今は街角に父新介正次の名を刻んだ石碑が残るのみであるが、小谷城址を山向こうに控える同市上野町には「近江孤篷庵」と称する寺がある。遠州の息子である正之¹²⁾が遠州の菩提を弔うために開山した寺院であり、その名は大徳寺孤篷庵に因んで命名された。本堂の南側

に枯山水式、東側に池泉式の庭園が広がっている。最寄りの北陸線の駅から結構な距離のある山裾にある寺と庭園であって落ち着いた風情ではあるが、その意匠が遠州的というより、寺の中に遠州ほかの墓があり、また近くに小室城址の史跡があって、遠州一族を偲ぶ縁^{よすが}の地という感じであった。小室城址は木々の中に石碑が残るだけであるが、屋敷指図によれば、主殿を中心に周りに土蔵、小屋を巡らし、敷地内に堀で囲まれた馬場もあり、その北と西側に養保庵と転合庵という茶室が備わっている。

遠州の生誕地に話が及んだので、彼の私的な空間である居宅の趣向にも付言しておきたい。彼の京における居宅は六角堀川町と六角油小路の間あたりにあり、これは義父の藤堂高虎の居宅を引き継いだものである。高虎は城づくり名人の武将で焼き物にも造詣が深かったので、それなりの自宅空間であったと思われるが、風流心に長けた遠州は数寄屋を含む独自の居室の改造をいただろうと想像される。そのことは、長く務めた伏見の奉行所の佇まいからも推し測られる。伏見奉行所はその新たな普請が遠州の着任と時期的に重なったこともあり、役所であると同時に居宅として、随所に彼の趣味性が反映されて



近江孤篷庵入口（長浜市上野町）



近江孤篷庵（長浜市上野町）（縁側からの庭）



小堀家墓所（近江孤篷庵の敷地の外の山合いにある。遠州政一から政方までの代々の墓が並んでおり、遠州の墓石は左から4つ目である。遠州の側室で正之の生母光輪院の墓（同5つ目）なども一緒にある。）

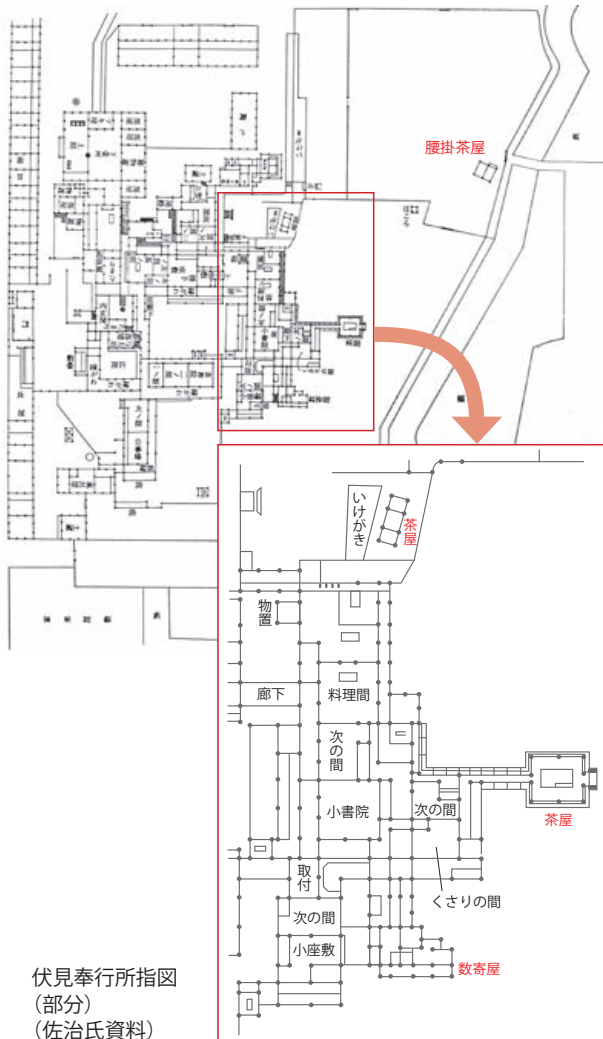
- 11) 忘筌の「筌」とは、魚を取る竹で編んだ漁具のことで、忘筌は目的（魚）を達したら手段（筌）にこだわらないことを意味する。功成なって風雅の道に親しむ遠州の心境を表しているという。表題を取った遠州の句「きのふといひ けふとくらして なすことも なき身の夢の さむるあけぼの」の心境にも通底するものがある。
- 12) 遠州の後、息子正之がこの地に陣屋を作り、「小室藩の政庁」とした。藩は正之以降五代続き、若年寄なども輩出したが、六代目の政方の代に至り財政難のため治政に混乱をきたした上、市中からの訴えの処理に不手際があり、伏見奉行はお役御免、家は改易となった。これにより小堀家は大名家としては途絶したが、時代が下って文政年間¹⁸¹⁸⁻¹⁸²⁸に御家人家として復活している。



忘筌席（京都市・大徳寺孤篷庵）



小室城址（長浜市小室町）



伏見奉行所指図
(部分)
(佐治氏資料)

いる。現在残っている当時の屋敷指図によれば、建物に付随して、あるいは独立して茶屋、数寄屋などが幾つも設えてある。

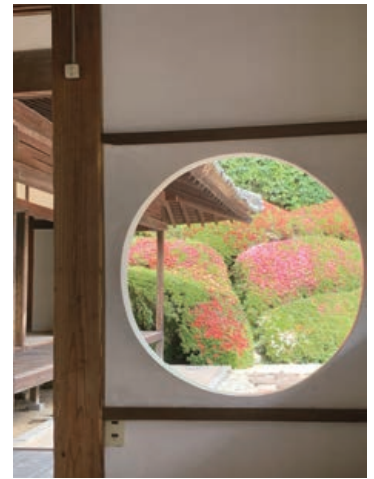
もう一つ遠州の庭として忘れてはいけないものが、岡山の備中高梁にある頼久寺にある。寺は正式名を天柱山安国頼久禅寺という臨済宗永源寺派に属するもので、南北朝時代に開基されたものとされる。先に記したように、慶長5年（1600年）遠州の父小堀正次が備中に国奉行として派遣され、本庁とすべき松山城¹³が荒廃していたため、政務のための館を麓の頼久寺に置いた。慶長9年に急死した正次の跡を襲った遠州はそこに蓬萊式枯山水の庭園を造成した。ここが貴重なのは、他の遠州所縁の庭園が時代とともに手が加わっているのに比べ、当時の彼の意匠が旧態に近く残されていることである。愛宕山を借景に組み込み、比較的低い築山状の亀島の手前に白砂敷きに囲まれた鶴島を配し、サツキの大刈り込みで大海波を表現している。庭を横切る敷石も絶妙で、方丈に丸く穿たれた窓からみる庭の景色も美しい。上記の京都・正伝寺の雰^{うが}囲気に似たゆったりした趣きが印象的であった。



(庭1)



(庭2)



(円窓)

備中高梁頼久寺庭園 (岡山県高梁市)

13) 備中松山城は現存12天守の一つで、戊辰戦争では朝敵とされ藩の執政山田方谷の決断で開城した。その後、明治期に一旦は廢城の決定がなされたが、これを取り壊し処理するには峻険すぎる山頂にあり、その故で取り壊しを免れた幸運な城。今や天空雲海に浮かぶ山城として人気を博し、今回の訪問に際してもわざわざこれを見に札幌から来たというご夫婦と一緒に来た。現在は城も登城道も整備されているが、杖ついて上がり下りするしかない立地は、確かにデイリーワークの政庁には向かない。



備中松山城 (岡山県高梁市 430mの臥牛山頂に聳える城への登城坂は高木と険しい岩が連なって、古くから山陰と瀬戸内海をつなぐ要衝の城であった。難攻不落ではあろうが、行政の拠点として毎日「通勤」するには向かない。)

ここまで公事にせよ、私的な建築、造園などにせよ、色々な遠州の芸術的業績¹⁴⁾を辿ってきた。個人的には「神仙蓬莱」型の庭よりも「虎の児渡し」、「獅子の児渡し」のような自由で開放的な庭が好きだし、明るい茶室の趣向も心に残った。個々に詳しくは紹介できなかったが、庭の詠えにも直線をうまく使った石組みや西洋の芝生を思わせる斬新な感覚が生かされているものがある。また、義父の藤堂高虎の得意とした城造りとは異なるが、遠州のたくさんの庭の石組みや滝の落とし具合、更には灯笼や敷石の配列にみる石の呼吸の測り方には、岩石を巡る近江の伝統技能¹⁵⁾が、さりげなく、しかし確りと遠州造形のベースとして刷り込まれているとの感慨を覚えた。

確かに、遠州に対する評価としては文化人としての傑出した功績に断然注目が集まるし、国奉行という役目柄から政治的リーダーとして当時の治政の改革を先駆的に先導するという立場ではなかったので目立たないが、筆者は、遠州の本性はやはり行政官にあると思う。茶湯や作庭を自らの本義として極めながら、世過ごし、身過ごしのために役職をこなしたという訳ではない。その逆だと思う。時代にふさわしい領民の生活と新しい経済に、彼の本領は向き合っていたと感じる。

戦国の最後の時期から江戸初期の変動期において、「威」と「前例踏襲」では立ち行かない社会の変化に行政官僚として立ち向かうには、単に「武断政治、軍政」から「文治政治」への発想転換の掛け声にとどまらず、それを実感できる所作や佇まいが必要であると感じていたのではないだろうか。ある種の「粋」の要素を加えることを目指したように見える。伏見の地勢的な重要性に鑑みると、柔軟性と多様な応変性、さらには社交性がないと、所謂豪商と言われるような人を含めた商人の発想を計り、産品

と金の流れを見定めて物流を司る伏見の奉行は長くは務まらない。しかし、重要性を増す経済の重みに沿うだけではなく、むしろ経済合理性に従った損得勘定についてもこれを相対化することを目論み、そのためにそれに資する縁を、茶道と作庭、建築の芸術的着想の自由さ、鷹揚さに求めたように思える。「粋」¹⁶⁾というのは、江戸期のもっと後の時代のもので、遠州のそれを「粋」の心持とするのは無理があるが、武家の意気地と禅宗の無常的精神論に裏打ちされた心境はそれに通じるものがある。

どんな仕事であれ、職業人にとって、職務に係る必要知識の習得と経験の蓄積は当然である。時代が下るに従って、世の中の仕組みが複雑となり、スピードも求められるようになる。それに伴って、職業人に求められる資質も行動も変化し、いわゆる分業化・専門化が進む。そして同時に全体を束ねる規律についてのルール作りも進められ、個々の専門分野を把握して、全体を管理する手法やコンプライアンスなどに依る統合チェック機能が重視されることになる。しかし、その統合チェック・運用は容易ではない。もとより何でもわかって、全てをこなせるスーパーマンを想定することは現実的ではないから、各段階、分野で「複眼的／複層的な付加価値が加えられる人材」をどれくらい配置できるかがシステムのパフォーマンスを決める重要要素となる。大学などにおいて、リベラル・アーツが見直され、事業遂行においても「一芸に秀でた人の多芸」、「他分野の経験知に照らして違う視点でのチェックを利かせる社外役員」が望まれる所以である。

そうした観点で遠州の治績を振り返ると、近江などの豊かな土壌と商業的先駆性に育まれながら、戦乱の武辺の世界から文治・安定の世界への変革期を、文化の趣で脚色したテクノクラートぶりで駆け抜けたように映る。

14) 遠州の庭は東京でも見られる。浅草の浅草寺伝法院、池上本門寺松濤園の庭園などがそれである。但し、残念ながら、いずれも期間限定の公開であるうえ、前者は現在改修中(2028年まで)であり、後者はコロナのせいでの公開時期(5月連休)にも今年の公開が見送られた。

15) 近江といえば、繊維をはじめ沢山の工芸技術があるが、この時代に近江衆の手になるものとして圧倒的な存在感を發揮したものに、城の石垣積技能がある。信長の安土城築城の頃から城は土囊積みから石垣を用いることが広まった。そして、堅牢な「野面積み」石垣の技能は、それを極めた近江出身の「穴太衆(あごうしゅう)」に因んで「穴太積み」と言われた。穴太衆は高虎が頼みにしたプロフェッショナル特能集団であり、穴太頭家は江戸時代には四家あった模様であるが、その実態は自らも穴太衆の系譜をつなぐ戸波亮氏による「穴太頭と穴太衆」という本に詳しい。

16) 「粋」というと、学生のころ読んだ九鬼周造の「いきの構造」を思い出す。そこでは、庶民が生き生きと文化を担った江戸期の情緒から、「野暮(やぼ)」や「気障(きざ)」を対極のものとして意識しながら、「武士は食わねど高楊枝」の痩せ我慢の意気地、諸行無常の諦観的詠嘆、そしてある種の婀娜(あだ)っぼさが絢交(ないま)ぜになった日本的な美意識が描かれていた。